

令和八年七月度 御報恩御講拝読御書

聖人知三世事

文永十一年十一月

五十三歳

後五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知るべきや。予は

未だ我が智慧を信ぜず。然りと雖も自他の返逆・侵逼、之を以て我

が智を信ず。敢へて他人の為にするに非ず。又我が弟子等之を存知

せよ。日蓮は是法華經の行者なり。不輕の跡を紹繼するの故に。

輕毀する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積まん。

令和八年七月度 御報恩御講 『聖人知三世事』 (御書七四八ハ九行目く一二行目)

【通釈】

後の五百歳には、誰が法華經の行者であると知るべきか。私(日蓮)はいまだ自分の智慧を信ずるものではないが、自界叛逆難・他国侵逼難(の的中)をもつて、自らの智慧を信ずるのである。あえて他人には示さないが、我が弟子達は、このことをよく心得なさい、日蓮は法華經の行者であると。不輕菩薩の化導を承継しているからである。軽んじしる人は頭が七つに破れ、信じる者は福德を須弥山のように高く積むであろう。

【主な語句の解説】

後五百歳…末法の初めの時代のこと。大集月藏經には釈尊滅後を五つの時期(五五百歳)に区分し、第五番目を「鬪諍言訟・白法隱没」(仏法上の争いが絶えず、釈尊の教えが効力を失う時代)と説いている。

自他の返逆・侵逼…薬師經(薬師瑠璃光如来本願功德經)に説かれる、謗法の国土に起こる七難のうち、自界叛逆難(同土討ち・内乱)と他国侵逼難(他国からの侵略や攻撃)のこと。自界叛逆難は文永九(一二七二)年の二月騒動として、他国侵逼難は二度にわたる蒙古襲来として現実のものとなった。

頭七分に破れ…十羅刹女が、法華經の行者を守護することを誓った言葉の中に、「説法者を悩乱せば頭破れて七分に作(なること 阿梨樹の枝の如くならん」(陀羅尼品第二十六・法華經五八〇)とある。

福を安明に積(む)…安明は須弥山のこと。高くそびえる須弥山のような福德を積むこと。伝教大師の『依憑天台集』(伝教大師全集三―三六四)に見える。

【背景と大意】

本抄は、文永十一(一二七四)年十一月、日蓮大聖人が五十三歳の御時に身延の地で認められ、富木常忍に与えられた御消息です。本抄の題号は、冒頭の「聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云ふ」(御書七四八)との御文から後代に付けられたものです。

内容は、はじめに儒教や外道、小乗經、法華經へと次第して真実の聖人を示し、拝読の箇所では、大聖人こそ不輕菩薩の跡を承継する法華經の行者であると述べられています。次に、「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」(同右)と明言し、いかに祈ろうとも日蓮を用いなければ、日本一國が壱岐・対馬のような悲惨な状態になるであろうと予言されています。そして弟子達に對し、「これは日蓮が尊貴というのではなく、法華經の御力が殊勝であるためだ」と指南し、本抄の結びとして「穢土において喜樂を受けるのはただ日蓮一人である」と、御本仏としての尊い御境界を明かされています。